慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	民族主義に関する文献
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1937
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.31, No.5 (1937. 5) ,p.779(123)- 789(133)
JaLC DOI	10.14991/001.19370501-0123
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19370501-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

民族主義に關する文献

加田哲二

一

民族主義は現代世界の一大潮流であつて、これを理解することなしには、世界の政治・經濟・思想の動きを洞察することは出來ないであらう。民族主義なる言葉は古いものであるが、それは現在においても活きた現象である。この言葉は、ヨーロッパ語のナショナリズム（Nationalism）の譯語であるが、それは、國民主義とも譯され、ある場合には、國家主義とも譯される。その用法は種々であるが、國家主義には、フランス語から出た étatisme といふ言葉が近時用ゐられるやうになつたのではあるが、國民主義の現實的方法としては、國家主義を採用する場合が、甚だ多いので、ナショナリズムの中に國家主義を包含せしむることも、無理ではない。しかし普通には、國民主義または民族主義の語を用ゐることが適當であらう。筆者は嘗て、國民主義を先進國、例へば、英・米・獨・佛・日・伊等におけるナショナリズムを示す言葉として用ゐ、民族主義を、現に民族統一過程にある植民地または半植民地國の思想及び運動を示すものとして用ゐたのであるが、この區別は、一應の理由を持つてゐるとは考へるが、世間一般には用ゐられてゐない。從つて、筆者は、この種の言葉の上の區別を廢して、國民主義・民族主義を一律に民族主義

といふこと、ヨーロッパ語のナシ■ナリズムの如くしやうと思ふものである。

さて、民族主義とは何かといへば、社會發展の一定段階において、民族の價値を高揚し、社會生活の絶對的價値または原理を民族またはその政治的表現としての國家に置かふとするものである。かくの如き見地に立つ主義及び運動は、現在までの歴史的經驗において、次の五つの代表的な形態があるやうに思はれる。

一、近世における民族形成運動としての民族主義

二、帝國主義段階における民族主義

三、ファッシズム

四、植民地または半植民地における民族主義

a　土着資本の運動としての民族主義

b　無產階級運動としての民族主義

五　ユダヤ民族運動――國際的民族運動

これらの民族主義を通じて問題となるのは、民族・民族性・民族主義の問題であり、更らに民族主義史の問題がある。いまこれらの諸點を説明する餘白を持つてゐないが、この原理的部分の實證的説明があつて、始めて、前記の五形態の民族主義の説明に入り得るのである。これらの民族主義の形態中、現に世界の問題となつてゐるものは、第二から第五にいたる形態のものである。第一の近世における民族形成としての民族主義は、民族主義の初期的形態として、主要國においては、少くとも、第十九世紀中に、この期間を經過して、現在では、民族主義の歴史の問題として、取扱はれるのみである。第四の植民地または半植民地における民族主義は、その意義において、第一の形態の民族主義に近いものではあるが、正確に一致するものではない。即ち植民地または半植民地における民族主義は、近世における民族形成における民族主義が封建的基本社會に對立したと同じ關係を植民地または半植民地の舊來の社會關係において有するものであるが、それが本國または先進國の帝國主義に對する關係を有する點、民族主義の指導者としての土着資本家があり、その民族主義の發展過程において、新らしい要素としての無產階級民族主義が成立することなどにおいて、近世の民族主義と本質を異にするものである。

更らに第五の國際的民族運動は、現在の場合主として、ユダヤ人運動――チオニズム――として知られてゐる特殊形態である。周知のやうに、ユダヤ人迫害問題は、ユダヤ人がその祖國を失つて、諸國放浪の民と化した時代からあるが、この被迫害民の平等化が第一の問題であつた。この問題は第十九世紀の後半に至つて、法律的には解決せられたが、社會的にはなほ解決せられず、殊にドイツにおいては、世界大戰後の排外主義の標的をこのユダヤ人に向けた民族主義運動があつた。而して、他面ユダヤ人の經濟的支援を受けるために、この被迫害民のために安住の地を與へんとするチオニズム運動が起されてゐる。このユダヤ人問題には、その眞疑については、斷定することを控へるが、フリー・メーソンリーの運動を秘密結社運動とし、ユダヤ的理想による世界征服陰謀とするものがある。もしさうだとすれば、これは一の狂信的民族主義の一つであるといふことが出來るであらう。ユダヤ人問題及び運動を、特殊な民族主義の一運動として擧げるのは、理由のないことではない。

これらの五形態の民族主義の研究が現在の民族主義研究の課題であるが、これに對して、如何なる文獻が存在するか。これがこの一文の主眼である。

二

民族主義の文獻を一望の下に眺め得られる文獻目錄は、現在まで殆んどないといつてもよいであらう。たゞ一つ民族主義の全體に關する文獻目錄が存するだけである。

1. Koppel S. Pinson, A Bibliographical Introduction to Nationalism. With a Foreword by Carlton J. H. Hayes. Columbia University Press 1935.

この文獻目錄は、七十頁に渉り、四百三十一の文獻を擧げ、その主なるものについて、簡單なる內容を書いたもので、民族主義文獻として、最も便利なものである。先づ第一に、理論的並に分析的研究で、こゝに百二十三點の文獻が擧げられ、第二に歷史的並に地域的研究において、三百八點の文獻が擧げられてゐる。第一文獻の項目は、（一）一般的分析的著作　（二）心理的研究　（三）民族主義と人種　（四）民族主義と宗敎　（五）民族主義と言語　（六）民族主義と政治　（七）民族主義と經濟　（八）民族主義・社會主義・共產主義　（九）民族主義・敎育・プロパガンダ（一〇）少數民族と民族自治であり、第二文獻では（一）古代・中世における民族主義（二）西洋における近代民族主義——この項目は更らに十二に分れてゐる。——（三）東洋における民族主義——この項目四——（四）ユダヤ人間の民族主義である。民族主義に關する廣汎な文獻を知らんとするものは、この編著者に感謝すべきである。勿論この種の文獻の全部を收錄したものでないことは勿論である。ドイツのナチスとか、イタリーのファッシスモ運動とかの個別的問題についての文獻の不足はいふまでもない。東洋における民族主義運動文獻については、主として英文のものばかりである。日本などについては、筆者の名も擧げられてゐるが、わが民族主義運動の現狀は、こゝに擧げられた文獻だけで不足なのは勿論である。しかしこの種の多方面の文獻の蒐集について、これまでの努力だけでも感謝しなければならぬものである。殊に、この種の文獻の最も缺乏してゐるときに出たものであるから、編纂努力の最高水準に到達してゐるものといつてもよいであらう。

三

次に筆者の遇目し得た文獻についての大體を記して置きたいと思ふ。勿論こゝには、ドイツのナチス文獻、イタリー・ファッシズムに關する文獻、日本・支那・印度などの民族主義文獻を除いて極めて一般的なもののみを擧げて置かふと思ふ。

2. Carlton Joseph Huntley Hayes, Essays on Nationalism. New York, 1926. 279 pp.

ヘイズの論文集であるが、ナショナリズムに關する理論と實際を論じた著作として、有名であり、前揭ピンスンの文獻もこの本を第一に擧げてゐる。筆者の讀んだのは、この書のドイツ譯であるが、その表題は次の如くである。

3. Hayes, Nationalismus aus dem Englischen übersetzt von J. F. Friedlaender. Herausgegeben und eingeleitet von J. Goldstein. 1929 Der Neue Geist-Verlag, Leipzig.

その內容は、先づ民族主義の本質を文化共同體說に置いてゐる。次に民族主義の成立を國民國家成立時代に求めて、民族主義の成立を說明し、更らに歷史的に民族主義の傳播を說明する。次に現代民族主義に入つて、宗敎としての民族主義・民族主義と國際戰爭・民族主義と軍國主義・民族主義と不寬容の問題・民族主義は呪詛か祝福かの諸論文を加へてゐる。著者の立場は、激烈狂燥な民族主義の害惡を說いてはゐるが、民族主義の反對者ではない。その論ずるところは、廣く歷史的事實に基いてゐて、正確であるから、信賴するに足るものであつて、民族主義研究の入門には適してゐる。更らに同じヘイズの著書に次のものがある。

4. Hayes, The Historical Evolution of Modern Nationalism. New York. Richard R. Smith, Inc. 1931

この書は、近代民族主義思想史である。即ち第十八世紀から現代にいたる思想史である。次の如き諸章に分れてゐる。

第一章　序論　民族主義と國際主義
第二章　人道的民族主義
第三章　フランス革命（ジャコバン）民族主義
第四章　傳統的民族主義
第五章　自由的民族主義
第六章　集約的民族主義
第七章　民族主義に於ける經濟的要素
第八章　結論　民族主義の諸問題

かくの如く、ヘイズの民族主義發展史は、そのすべての方面の思想を論じてゐて、甚だ便利の著作であり、一九三一年刊であるから、まだナチスは論ぜられてゐないが、イタリー・ファッシズムの先驅者については、多少の頁を費してゐる。書中しばしばドイツ語の誤記と思はるものがあるのは、遺憾であるが、鳥瞰圖的著述としては、2に擧げた同氏の著述とともに必讀すべきものであらう。

四

ヘイズが、思想史的方面を力説するのに對して、民族主義をその社會現象として理解せんとするものに、ワルデマア・ミッシャアリッヒがある。

5. Waldemar Mitscherlich, Der Nationalismus Westeuropas. Leipzig Verlag. von C. L. Hirschfeld. 1920

この書は、民族主義が如何なる時代に成立し、如何なる社會現象的意義を持つてゐるかの問題を主題とした著述で、三百三十餘頁の著述中二百三十餘頁を民族主義以前及び民族主義の成立に與へてゐる民族主義成立の歴史的過程の研究で、かゝる方面の研究として、最も優れたものゝ一といふことが出來るであらう。ビンスンの記するところによれば、その第二版が一九二九年に

Nationalismus: Die Geschichte einer Idee

として出版された由であるが、第一版と異るところがないさうである。さうだとすれば、「思想の歴史」との副題は、内容に適應してゐない變更といはねばならぬ。

民族主義を同じく社會現象として取扱ひ、その對立物としての國際主義との關聯において、論究したものに、

6. Herbert Adams Gibbons, Nationalism and Internationalism. Frederick A. Stokes Company, New York, 1930.

がある。民族主義の歴史的過程の研究と見るべきもので、英國での講演の筆記に加筆したものであるらしい。ギボンズは、民族主義の歴史をフランス革命以前に遡らしたことを非常に得々と述べてゐるが、前掲のミッシェリッヒの著述の如きを讀み、近代資本主義の發展史に興味を持つてゐるわれ〳〵には、フランス革命以前に行かぬことそれ自身が笑ふべき見解ではないかと感ずるもので、ギボンズの態度は、その得々たるに拘らず、當然のことのやうに思ふ。

しかし、民族主義をフランス革命から說き起すのは、多く見るところである。イギリスの有名な歴史家グーチの如きも、その一人である。

7. G. P. Gooch, Nationalism (The Swarthmore International Handbooks edited by G. Lowes Dickinson)1921. London. The Swarthmore Press Ltd.

この書は百二十頁餘の小著であるが、フランス革命以來の民族主義の歷史を、一般史家の立場から論じたもので、第一フランス革命、第二メッテルニッヒの時代、第三イタリー及びドイツの統一、第四トルコの結合、第五大戰前第六東洋の覺醒、第七世界大戰となつてゐる。

近代ヨーロッパにおける民族主義は、グーチの著述におけるやうに、第十九世紀の現象とするものが多數であるが、その中、第十九世紀の五六十年代における諸國民における民族主義――ヘイズのいふ自由的民族主義をもつて典型的なものと見る見解は、一般に行はれるところであるが、この時代の史實を記したものに、最近の著述として、次の如きものがある。

8. Robert C. Binkley, Realism and Nationalism, 1852-1871. London, Harper & Brothers Publishers. 1935.

民族主義と國際主義とを純然たるヨーロッパ的現象と見、この二つの主義の調和するところに、ヨーロッパ近代史の極致があるとするものは、ラムゼー・ミュアである。

9. Ramsay Muir, Nationalism and Internationalism. The Culmination of Modern History. London. Constable & Company, 1916.

この書には邦譯がある。

10 竹林熊彦譯　國民主義と國際主義――西洋近世史の極致――同文館　大正十五年

この著述は、民族主義及び國際主義をヨーロッパの政治的原理とするといふ獨斷論に出發するものであつて、その出發點は如何にも奇妙なものであるが、民族主義と國際主義との歷史を簡單に述べた點で、近代民族主義史として役立ち得るものであらう。

五

史實としての民族主義を論ずるとともに、世界政治における民族主義の貢獻及びその地位を、他のこれと關聯してゐる諸主義及び運動とともに論じたものに、社會學者バアンズ教授の著述がある。

11. Harry Elmer Barnes, World Politics in Modern Civilisation, The Contribution of Nationalism, Capitalism, Imperialism and Militarism to Human Culture and International Anarchy. New York, 1930.

この書は、近世初期のヨーロッパ膨脹運動としての植民政策の採用から、商業革命の遂行、工業革命の成熟と民族主義、資本主義を論じ、更らに、資本主義と民族主義の抱合である國民的帝國主義の發生、これによる世界分割の過程から、被抑壓民族の狀態、並に世界大戰への過程を論じ、神聖戰爭の意義、即ち國民使命遂行の手段としての聖戰の傳說の興廢について論じてゐる六百數十頁の大著であつて、近代史の基礎としての資本主義の發展と民族主義の關係、それの帝國主義への轉化は、綜合的によく論究されてゐる。近代社會の社會學を建設せんとする野心的著述とも見られるものであつて、空疎な哲學的論議を理論と稱し、砂をかむが如き判りきつた社會調査を社會の實際的研究と稱する者の多い社會學者の著述としては、最も面白い企圖であるといへやう。

バアンズの綜合的なるに對して、民族主義と帝國主義との關係、即ち民族主義の發生とその帝國主義への轉化を現實の諸國について論じたものに、ハインリッヒ・シュネーの著書がある。

12. Heinrich Schnee, Nationalismus und Imperialismus. Verlag von Reimar Hobbing. Berlin, 1928.

シュネーは民族主義の發端を、ゲルマン人によるローマ帝國の崩壞とローマ教會の世界主義に對する反對に求め、その發展を民族國家の成立に求める。而して、この近代的民族主義の帝國主義への轉化を認識せんとして、各國について、これを研究し、これを國際的紛爭の根源と見るものである。シュネーは、この見地から、ドイツ・イギリス・アメリカ合衆國・日本・ロシア・フランス・イタリーの民族主義と帝國主義を論じ、更らに、民族主義と帝國主義との現狀及び將來を論じてゐる。この各國の發展を、最も廣範圍に論究した點において見るべきものである。

バアンズ並にシュネーの著述に對して、ヨーロッパ列强の民族主義の勃興とその帝國主義への轉化を論じ、特にその民族的帝國主義の活動を論じたものとして、ムーンの著書を擧げることは失當ではないであらう。

13. Parker Thomas Moon, Imperialism and World Politics. New York, The Macmillan Company, 1928.

更らに、東洋における西洋列國の帝國主義的活動を、外交史的に見た著書として、最近のものに次の如きものがある。

14. Taraknath Das, Foreign Policy in the Far East. A Study of Imperialism and Nationalism. Longmans, Green & Co. New York, 1936.

民族主義に關しては、尙ほ多くの文献を擧げることが出來る。ナチス文献（本誌第二十八卷第七號）は既に發表した。その外、イタリー・ファッシスト文献・支那民族主義運動文献・印度民族主義文献・日本民族主義文献・ユダヤ民族問題文献・民族問題文献などは、いづれ機會を得て發表したい所存である。

尙ほ筆者には次の如き民族主義に關する論著がある。

「國民主義と國際主義」昭和七年刊
「民族運動」（世界經濟問題講座）昭和八年刊
「國民主義」（同　　）昭和七年刊
「日本國家社會主義批判」昭和七年刊
「印度民族運動概觀」（慶應義塾各國經濟事情研究會編　大英帝國の經濟及び經濟政策　所收）
「民族主義の發展」（三田評論　昭和十年十二月號）

右は何れも舊稿に屬し、筆者の意に滿たず、論述の不充分な點もあるので、絕版に附し、目下稿を改めつゝある。

筆者は、民族主義の理論及び運動において、その基礎を科學的に證明し得ない血液、從つて、これに根底を置く人種的特性論の主張に同感し得ないものである。筆者は、どこまでも現實の社會における問題としての民族主義を觀察せんとするものであつて、民族主義者の中には神秘的言辭によつて、その理論を飾るものがあるとすれば、その現實的意義が何處にあるかを研究せんとする現實的社會學的方法を採るものである。以前の論移よりも進步したものが出來れば、幸と思つてゐる。

（一九三七・四・二二）